

教育センター通信

ほど 火床の火の心を紡ぐ

第9号（通算第48号）
平成30年1月24日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター 発行



校内書き初め大会の様子
1月11日 須頃小学校

不登校児童生徒への支援

小中一貫教育推進課 指導主事 小田 貴樹

文部科学省が実施した不登校の追跡調査で、平成18年度当時不登校であった中学3年生の5年後の状況について、379人にインタビューした結果が公表されています。その回答が否定的、肯定的、中立的に分類されています。「行けば良かったと後悔している」という否定的な回答が39.4%、「行かないことも意味があった」という不登校に対する肯定的な回答が32.6%、「仕方がない又は考えないようにしている」等の中立的な回答が28.1%という結果になっています。否定的な意見では、「一般知識や対人関係の経験に乏しい点が悔やまれる」、「不登校となったことで友人関係もなくしてしまった」というものであり、肯定的な意見では「不登校を経験したおかげで今の自分がある」、「不登校を経験したことで出会いや友人の大切さを知った」というものでした。中立的な意見では「当時は不登校をするしかなかったから仕方がない」、「過去のことは考えても仕方がない」などでありました。経験者は様々な気持ちを抱えながら当時を振り返っています。20歳になり自分で満足できる生活を送っている場合は、過去の不登校において「自分にとっては意味があった」と肯定的に捉えています。改めて将来を見据え、一人一人に寄り添い、きめ細やかな支援が必要であることが示されています。

不登校支援の目標は、将来の社会的な自立に向けての支援です。不登校状態が継続すれば、時間の経過とともに不登校の要因は変化し、学習の遅れや生活習慣の乱れなどが加わることで解消がより困難になり、学校に復帰することが難しくなります。不登校児童生徒への初期対応を迅速に行い、関係機関と連携した支援を行うことや、校内委員会等で定期的な改善に向けた協議を行い、新たな不登校を出さない「未然防止」の取組をお願いします。

「プログラミング教育研修会」(裏館小学校 PC 教室)

1月15日、新学習指導要領で示された小学校におけるプログラミング教育についての理解を深め、どのような準備をすればよいのかについて学ぶことを目的に、「プログラミング教育研修会」を開催しました。



情報教育の専門家でいらっしゃる新潟市立総合教育センターの山本政義様を講師に迎え、プログラミング教育が必要になっている社会背景、プログラミング教育の目的、導入や実施方法などについて具体的に、体験を通して研修することができました。



まもなく本格的に訪れる第4次産業革命 AI (人工知能) IoT (Internet of Things) の時代、その激しく変化し続ける世界において、様々な状況に対応する力、試行錯誤しながら価値を生み出す力、アイデアや解決方法を創造する力が必要になる。それらの力を育成するための一つの手段がプログラミング教育である。

プログラミング教育は、プログラム言語を学ぶことではない。

プログラミング教育の目的

プログラミング的思考を学ぶ

プログラミング的思考で学ぶ

自分が意図することを実現するためにどのような動きの組み合わせが必要か、どう改善すればよいかを論理的に考える。

各教科等で、プログラミング思考を使って学ぶ
教科等で学ぶ知識及び技能等をより確実に身に付ける。

変化する社会に対応する力

プログラミングの体験

各教科の学びに活かす

小中一貫の観点から、中学校技術科との接続の在り方、技術科教員からのサポートも検討。



総合的な学習の時間等を使って、プログラミングの体験を通して、プログラミング的思考を学ぶ。
※左上の図は、文部科学省がプログラミング体験用の教材としてHPで公開している「プログラミン」

各教科等でプログラミング的思考を使って学ぶ(例)
算数(筆算の手順を明示して考える)
理科(実験の順序をフローチャートで理解する)
体育(サッカー等の作戦を考える)
家庭科(カレーライス作り方の順序をまとめる)

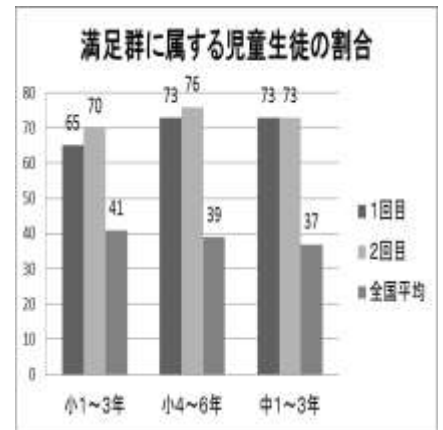
【受講者の声】 ※肯定的評価(参加してよかった、どちらかと言えば参加してよかった): 100%

- ・プログラミングというとプログラム言語を学んでいくのかと思っていましたが、それだけではなくプログラミング的思考で学んでいくことが大切だと分かりました。今後の授業の中でもプログラミング的思考でもできないか考えながら授業をしていきたいと思ひます。
- ・とても難しいことをしなければならないと考えていたのですが、プログラミング教育の考え方を教えていただき自分にもできそうだと意欲をもてました。学校に戻って伝達しようと思ひます。ありがとうございました。
- ・今後どのようなことを意識してプログラミング教育にあたっていくとよいかがとてもよく分かりました。難しいと考えていたのですが少し安心しました。子どもたちとプログラミンなど使っていきたいと思ひます。

「hyper-QU を活用した学級づくり～よりよい学級づくりのヒント～」

小中一貫教育推進課 指導主事 田村 和弘

hyper-QU（以下：QU）を全市で導入して5年が経ちました。いずれの年も満足群に属する生徒の割合、学校生活に関する意欲とソーシャルスキルに関する得点で全国平均を大きく上回りました。今年度も1，2回目ともに高い数値を示しています（右図）。これも市内の教職員の皆様が、QUの結果を丁寧に分析され、規範意識と温かい人間関係づくりを柱にきめ細やかな学級経営をされている成果であります。しかし、1回目と2回目を比較して気になることが2点ありました。その2点の解決のヒントとなる実践を紹介します。



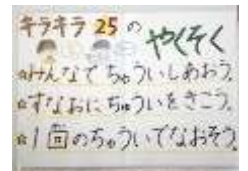
1 小学校で拡散型と判定された学級が増えたこと

＜拡散型の解決のヒントはこの実践にあり＞

拡散型とは「教師からルールを確立するための一貫した指導がなされていない状態、児童生徒の学級に対する帰属意識は低く教師の指示が通りにくくなっている状態（河村 2012）」です。教師の適切な支援を受けながら、児童生徒自らがルールづくりをすることが大切です。

(1) ルールづくりの実践

右上の写真は井栗小学校の実践です。学級目標を達成するための約束が掲示してあります。年度当初に学級目標を設定するとともにその目標を達成するためのルールをつくります。時々学級でルールが守られているかチェックする機会を設けることがポイントです。



(2) ソーシャルスキルの実践

右下の写真は須頃小学校の実践です。年間5回全校ソーシャルスキルトレーニングを実施しています。全校児童が集まり、オリエンテーションをしたあと、各学級で学年の発達段階にあわせたスキルを学習しています。1回きりの学習で終わらず、その後強調週間を設けてスキルを定着させる取組も行っています。



2 中学校で不安定型と判定された学級が増えたこと

＜不安定型の解決のヒントはこの実践にあり＞

三条市の中学校における不安定と判定された学級の特徴は、満足群に属する生徒が60～70%近くいることです。満足感が二極化し、少数の不満足群が疎外感を感じていると思われます。まず「人を傷つける発言をしない」などルールを再確認します。その後、グループワークやエンカウンターを通し、感情交流（人と関わることは楽しいなど）を徐々に行っていきます。

(1) ルール徹底の実践

不安定な状態になると学級独自の取組に拒否反応を示す生徒が出てきます。そんなときは生徒会の力を借ります。生徒会活動の一環となれば、取組の中心となる学級リーダーへの反発も防止できます。右の写真は大島中の実践です。生徒会が「一人一人が居心地のよい島中をつくる」と宣言しています。これが学級の取組の後ろ盾となります。



(2) グループワークやエンカウンターの実践

右の写真はしただの郷学園の実践です。仲間づくりのためのグループワークを行っています。活動後、振り返り（シェアリング）を行い、児童生徒同士の感情交流を図ることが大切です。



＜解決のヒントは三条市の先生方の中にあり＞

K-13法とは河村茂雄先生（K）の開発した、QUのプロット図を見ながら、13のプロセスを踏み、グループで課題解決の具体策を見出す方法です。先生方の出したアイデアが更に磨かれ、新しい具体策が見つかります。先生方のアクティブ・ラーニングです。ぜひ各校で実践してみてください。

＜参考文献＞

河村茂雄『学級集団づくりのゼロ段階』2012年 図書文化社 P25



平成29年度 小中一貫教育実践研修

12月26日(火) 13:00～(三条市役所栄庁舎)

子どもへの支援力向上 を目指すカウンセリング 研修会

～ 子ども同士の対立を解決する力を高めるために ～

講師: 福井大学 教職大学院講師 綾城 初穂 様

学校生活におけるいじめ、暴力、不登校等の問題行動について、児童生徒自身で問題を解決できるように教員の指導力の向上を目指して、カウンセリングの在り方について研修しました。講義だけでなく、具体的なワーク、演習を通じて児童生徒が対立関係を解決する力を高めるための教師の関わり方について学びました。(市内外の小中学校の先生方55名参加)

講師の綾城先生は、東京都立大学人文学部卒業後、東京大学大学院教育学研究科を修了され、臨床心理学や教育相談を研究の専門分野とされています。また、臨床心理士でもあり、児童生徒、保護者の心理的援助もされています。現在は、文部科学省卓越研究員として「セーフ&ピースフルスクールアプローチの開発」に従事され、学校の対立問題解決プロジェクトを研究されています。



■ 「Safe & Peaceful Schools アプローチ」

- ・もめごと、喧嘩、暴力、いじめ、学級崩壊、対人関係の悩み、不登校などの学校での「問題」は、対人関係の「問題」とも言える。大人による監視や規則で縛るといった対処療法ではなく、児童生徒の心を育てるといふ根源的なアプローチをとる中で対人関係の問題解決を学んでいく。
- ・「問題は、その児童生徒、その教師、その親にあるという、人の性格や人格、自己などに問題の原因を帰属する考え」(本質主義的理解)にはデメリットがある。①「問題」が当事者に限定される。②罰則を伴う説得・指導が正当化される。③かなり限定的な解決しか出さない。



- ・問題解決に当たり、困っている本人が「問題」とされてしまい、寛容や情状酌量の余地のないゼロトレランス方式で問題となる「誰か」を積極的に指導排除しても学校の雰囲気は変わらない。むしろ教育場面では不利益を生む。
- ・児童生徒自らが問題の解決に向かうようデザインし、協働によって周りの人を誰も排除しないで問題解決できるようにすることで、児童生徒の学びにつながるアプローチにしていく。



■ 「人が問題ではない。問題が問題だ。」 ☞ 「ナラティブ・セラピー」の基本的な考え方

- ・人は多くのストーリーから自分をつくり・つくられている。問題が起きている状況では、あるストーリーが優勢となり、別の側面が見えにくくなる。問題行動を規則違反と見なして罰則を適用するという考え方(懲罰的アプローチ)ではなく、問題行動を「人間関係を傷つけた(が壊れた)」と見なし、その傷を修復するという考え方(修復的アプローチ)で。行動の原因より、行動の影響を検討する。解決に向かうときは別の望ましいストーリー「オルタナティブ・ストーリー」に光(焦点)を当てる援助をする。

～ 「参加者の声」から ～

※100%の肯定的評価(役に立った・どちらかといえば役に立った)

- ◆カウンセリングマインドに新たな視点を与えてくれる研修となった。
- ◆子どもの内面に問題を見つけることに終始し、指導や支援が行き詰まる教師には有効なカウンセリングの手法を知ることができたと思える。
- ◆子ども同士の問題を解決するための児童生徒への接し方、関係づくりの技能習得に関する教職員のニーズの高さが分かった。
- ◆二人組のワークショップをとおして、理論・技能の理解は具体的にできたと思う。ただ現場で実践していくためには、理論編だけでなく、実践編の研修機会の設定も必要である。

「基本的なメッセージ」(3点)

- ① 他者どのように生きていくかを子どもたちが学べる必要がある
- ② 学校は、対立の解決と平和な関係性を学べる絶好の場所
- ③ 人が問題ではない。問題が問題だ。



差異や対立を踏まえて、他者と民主的に生きていくために、「人ではなく、問題そのものを」という見方から様々な問題の解決を図ることが必要だと改めて感じました。